

經学と諸子学の方法をめぐる 章炳麟と胡適の論争について（上）

陳 平 原 著

阿 川 修 三 訳

内容提要

經学と諸子学とに研究方法上の相違があるか否かということ、これこそが「研究方法上の根本的問題である」章炳麟と胡適の論争は、単に彼らの清代学術に対する評価の相違に係わるだけではなく、現代中国の学術がどのように発展していくかという分岐点の意味をも持っていた。胡適が清代の学者の考証学は「科学的方法に暗合している」と推賞したのに対して、章炳麟は清代の学術は玄言（形而上学）を排斥したため、大成しなかったと批判したのである。後に、「戴震論」を通して、章と胡の両者は「經学」と「哲学」をどのように歴史的に位置づけるかという点では段々と接近してはいったが、諸子研究の方法と手順では終始大いに隔たりがあった。この原因はかなりの程度、二世代の生活経験と学術訓練の相違に帰すべきであろう。すなわち、章炳麟が「近頃憂うことがあり、そのため益々悟ることがあった」と主張するのに対して、胡適は「証拠に基づかねばならない」と主張し；章が「その根幹を理解し」、「要点をつかみ、真理を探求する」と言えば、胡は「あらゆる知識や道理を知り尽くすことによって全体の理解に到達し」、「系統的に筋道を立てる」と言い、章が「主観に依り客観に依らない」と言えば、胡は「他の哲学体系を借用して変化を解釈する道具とする」と言った。胡適は五四文化運動以後の新しい学術のパラダイムを代表したが、その日に日に明らかになった方法上の欠陥は、章炳麟を典型とする「もう一つの可能性」を想起せしめた。

序

今世紀の中国学术界において、章炳麟の「国学の提唱」^①と胡適の「国故整理」^②とはいずれも広範な注目を浴びた。胡氏は「国故」の理解での上で章氏から恩恵を受けたことを包み隠そうとはしなかったし、顧頡剛は更に章、胡両氏の歴史的つながりを直接的に指摘した。^③しかし、章、胡両氏は同じく国学を研究しながら、その研究方法にはかなりの違いがある—この違いとはある程度、学術パラダイム転換期の「前を受け継ぎ」「後を啓く」という二世代間のギャップを代表している。しかし、ここで言う「前」「後」とは、主に学術訓練（伝統的書院教育か新式学校教育か）の違い^④を指し、価値判断を含んでいない。1922年4月から6月にかけて、章炳麟は上海で一連の「国学に関する講演」を行った^⑤；翌1923年1月には、北京大学は胡適の「発刊宣言」を冠した『国学季刊』^⑥を創刊した。この二つの出来事は世代交代の象徴と見做して差し支えない：これ以前、国学を研究する者は章炳麟を傑材とし、これ以後は胡適とそのシンパの天下となったからである。章、胡両氏の学問には共通点もあるが、相違点も多い。本文では「世代交代期」に起こったささやかな論争を取り上げることで、二種類の異なった学術思想の方向性を探りたい。

一

1923年11月、国事を議する公開電報を打つのに血道を上げ^⑦、既に専門の著作を暫くの間休筆することを新聞紙上で「通知」していた、章炳麟は章士釗の「そそのかし」に乗って、再び墨学を論じることとなる。二人の章氏は互いに褒めたたえるとともに、連係して梁啓超、胡適の墨学研究の「武断」を批判した。胡適は年若く血氣盛んであったのでこれに応戦し；梁啓超は「見て見ないふりをした」。多分自分が道連れにすぎないことをわかっていたのであろう。この論争の諸論文は『胡適文存二集』に収められた時、

「墨学を論ず（論墨学）」という題を冠せられた。その中の章炳麟先生の二通の書簡は『華国月刊』に掲載されたものと字句に若干異同があるが、大局には係わらない。この論争は表面上は『墨子』「経上篇」の「辨争彼也（辨とは彼と争うなり）」という句に対する訓詁解釈の違い^④から起こったかに見えるが、実は異なった学問方法及び二世代の学者間のギャップにも係わっており、大いに深い意味が存しており、真剣に探求するに値するのである。

事の発端は、先ず章士釗が胡適が（「墨子小取篇新詁」〔1919年、『胡適文存』第1集所収〕の中で）「辨争彼也」の「彼」を誤字と判定したことに武断であると批判したことに始まり、続いて章炳麟がそれについて章士釗に最初の書簡を出し、胡適が誤ったのはただ武断と言うだけに止まらない、最大の欠点は「諸子学と経学とではその研究方法に違いがあるということを知らないということだ」と指摘したのであった。察しのよい胡適は章士釗の具体的な批判の方は放っておいて、却って章炳麟先生に「結局、諸子研究との方法と、経学研究のそれにどのような違いがあるのでしょうか」と質したのである。胡適は自ら「浅学の人」と称していたが、この問いには答案を用意していないわけではなかった：「経と諸子は同じく古（いにしえ）の書籍である以上、これらを研究する方法はただ一つしかない。即ち、校勘学と訓詁学の方法によって、本文の校訂と古義の選定を行うことである」と言うのが彼の答案であったのである。彼は経学と諸子学が研究方法上の違いのないことを証明するために、高郵の王引之、王念孫父子と章炳麟の師である俞樾、孫詒讓^⑤を持ち出して、その例証とした。

胡適が強調したように、諸子学と経学の研究 방법에違いがあるか否か、これこそが「学問方法上の根本的問題である」が、章炳麟もそれを「決して安易に放置しようとしたのでは」なかった。彼の章士釗に宛てた二通目の書簡では引き続き墨学の論争を展開するほか、主に胡適の提起した問いに次のように答えた：

前の手紙では、「墨辯」を論じた際に、経学と諸子学とは研究方法上に違

いがあると言いました。昨日、あなたが胡適からの手紙を示されましたが、その中で、校勘訓詁は経学研究と諸子学研究の通則であるとして、王念孫、俞樾両先生をその例として挙げていました。思いますに、校勘、訓詁によって、経学を研究し諸子学を研究するのはただ学問の最初の人口にいるに過ぎません。しかし、経書は多くの場合、事実を述べ、諸子は多くの場合、義理を明らかにするのです（これはおおよそについて言ったままで、経書の中でも『周易』は義理を明らかにしていますし、諸子の中でも『管子』、『荀子』は事実を述べています。しかし、諸子で事実だけを言い、義理に言及しないものはほとんどありません）。だから、この二種類の書籍（経書、諸子）を研究する場合には、先ず校勘、訓詁を一通り終えてからは、各々のその特性を重視して研究を進めざるを得ないのです。だから、賈逵、馬融のような経学者は諸子の研究に向きませんでしたし、郭象、張湛のような諸子学者は経の研究に向きませんでした。王念孫、俞樾両先生は、やっと学問の初歩の段階にいるにすぎないのです。²⁾

このように、章炳麟が「ただ校勘、訓詁という手間をかけながら、義理学説に通暁しようとしなさい」者を誹って、「やっと学問の初歩の段階にいるにすぎない」と論断したのに対して、胡適はそれに同調しながらも、しかし、「今の墨学を論ずる者は大体才がなく初歩の段階で成すところがない」と認定したから、まだ「やっと学問の初歩の段階にあるにすぎない」校勘、訓詁を大いに談じなければならなかったのである。

コロンビア大学哲学科を卒業した³⁾胡適によって校勘、訓詁の必要性が唱えられたのに対して、杭州詁経精舎⁴⁾出身の章炳麟によって清代學術が批判されたと言う事実は、これ自身少しく人を啓発して深く考え込ませることである。章炳麟の批判に対して、胡適の弁解にもなかなか説得力がある：すなわち、義理を明らかにするには先ず「校勘、訓詁に基づかなければならない」し、しかも「訓詁を満足のいくようにするには先ず義理の理解がある程度必要となる」と言うのがそれである。⁵⁾ 真剣に追求して行けば行

くほど、「義理」と「訓詁」のどちらを重視するかという問題は、いとも易々と解釈上の循環論に陥る。更にこれに少し個人の気質が加われば、「古に既にあった」漢学と宋学との争いへと変わってしまう。『菑漢微言』で、章炳麟は学者が研究をする場合の心得として、「各々志に従う」べきで、「四民がそれぞれの仕事に励む」ようにすることこそ肝要であり、「漢学と宋学とが争い確執する時に、どうして調人（周代、人民の争う事を調停したと言われる官職）の手を煩わす必要があるだろうか」⁴⁹と述べているが、「漢学と宋学とを公平に扱う」という言い方はもとより卓見ではあるが、実行することは難しい；というのは、人は具体的な歴史状況に置くと、人それぞれに特定の「憂慮」を発すからだ。章炳麟は、「疎通して遠きを知ろうとすれば、好んで玄談を行う」か、また「文理を詳らかに考察しようとするれば、実事求是に傾く」かは、学者個人の天性や志向の他に、更にその時代の弊害への「対策」という意味も含まれていると、主張したのである。興味深いことに、晩年この論争のことを再び取り上げた章炳麟は自分の当初の立場をまるっきり忘れてしまったのである。

昔、胡適が章士釗と「墨經」の解釈をめぐる論争したことがあったが、未だに決着がついていない。私はその時胡適に次のように論じた。「先人は諸子学研究は多くの場合、經学研究をしてから行ったのである。思うに訓詁と事実によって証明しようとしたのであって、抽象的な言葉で憶測する事を望まなかったのである。ところが、今日の人は文字、音義で多くまだわかっていないのに、諸子学研究で名を挙げることを望むだけで、その多くは確固たるものではなからう」⁵⁰

諸子学研究には、訓詁、義理一方に偏ることなく共に重視すべきであることがわかる。この見解は実に常識的であることから、章炳麟が經学研究と諸子学研究の方法を区別したことに後の人がそれほど意に介さないのも無理からぬことである。しかし、私の見るところ、章炳麟のこの説は、彼

自身の学術に対する姿勢を体現しており、彼の中国學術史全体に対する考え方と五四文化運動以後の学術の方向性への批判をも含んでいるのであり、なおざりにすることはできないのである。

二

実は章氏が論争した点は、義理と訓詁のどちらが先でどちらが後か、どちらが重要でどちらが重要でないかにあるのではなく、經学研究と諸子学研究とは校勘訓詁という「学問の最初の入口」を通り過ぎた後に、必ず重視するところが各々異なるということにある。章炳麟の見るところ、經学研究とは、その働きは文学の異同を調べ、歴史の真相を明らかにすることであり、つまり「客観の学」であり、実事求是を重んじ、「比較し本来の姿を知ることで前進を求めるものである」；これに対して、諸子学研究とは、その要諦は義理を求め、人生の奥深く知りたい点を述べることにあり、つまり「主観の学」であり自らの主張を堅固にすることを重んじ、「直観で自得することによって前進を求める」ものである。⁶⁾ 章氏が王念孫、俞樾諸先生に不満だったのは、彼らが經学研究の方法で諸子研究をし、また先秦諸子を史学と見做し哲学として研究しなかったからである。王、俞両先生のやり方はちょうど最近の人が「墨辯」について論争するのに、言葉の意味の辨別考証に終始して哲理の探求には及ばないのである。章氏は經学と諸子学の違いがただ目録学上に存在するだけではなく、學術史上にも大きな違いがあることを強調し、更に經学研究、諸子学研究それぞれ學術上の方向性に違いのあることを際立てさせたが、これは章炳麟の一貫した思考方法であった。前年(1922年)章氏は江蘇省教育会の招きに応じ上海で国学について講演し、その中で、彼は哲学研究は「直観によって自得」しなければならず、清人のように「文字の校勘訓詁のみから意味を求める」⁷⁾べきではないことを強調した。これは本来新派の学者への当て擦りの意味合いがあった；この論争の時は、墨学を論ずるに事寄せて、

胡適が清代学術を實際以上に褒めそやすことに対して、彼は真正面から不満を表明したのであった。

アメリカに留学した時、中国の考証学、西洋の版本学（テキストクリティシズム）とデューイのプラグマティズムを接ぎ木して一つの学問方法を作りだして以来、⁸胡適は清代学術にかなり共鳴していた。北京大学に招聘されたのは、一編の考証の論文のお陰であり、『中国哲学史大綱』の出版後には、更に「西洋の学問とともに漢学をも理解できる」と称賛を浴びた⁹ために、胡適は自分の考証能力に自信過剰となり、たてつづけに清代学術について論文を著した。1919年一年を例とすると、先ず、『中国哲学史大綱』の「導言」では、清代学術をヨーロッパの文芸復興に比し、ついで「論国故学」では、清代の学者の考証を「科学的方法に暗合する」と賛美し、「清代学者的治学方法」では、漢学者は「仮説を立てる能力を有し、また到るところで証拠を求め、仮説の是非を実証する能力を有した」ので、その研究には「科学的価値」があるとまで強調した。こうようにして、「証拠に基づかねばならない」というスローガンが一世を風靡し、「科学的方法」は一転して「考証学」と同義語となり、更に転じて「清代の学者の家法」と同義語となったのである。これらの欺瞞的議論に直面しながら、梁啓超に清代学術のために「大いに気をはいた」とされた余杭の章炳麟¹⁰は遂に公開の場でこれに反駁することはしなかったのである。その重要な原因の一つは、胡適が清代学術の方法を奨励した時に、ただ一人褒めた当代の学者が他ならぬこの章炳麟先生であったからである。章先生は当然情に逆らえなかったのである。彼は『中国哲学史大綱』を読んで手紙を出し、かなり手厳しい批判をしたにもかかわらず、それを世間の例に従って公開の場で発表しなかったのである。もし北京の社会科学院に現在所蔵されている「胡適文書」¹¹が徐々に公開されなければ、読者は胡適が五十年代に『中国哲学史大綱』の「莊子時代の生物進化論」という章を「若気の至り」であると前非を悔いて告白したことが、正に四十年前の章炳麟の批判を受け入れたものであることを想像だにできなかったはずである。¹²

胡適が中国哲学史を研究するに当たっては、章炳麟に多大な影響を受けたのである。『中国哲学史大綱』は初版が出版されて忽ち二月で重版になった。胡適は興奮の余り、この書物を著すのに世話になった師友に謝意を表した。

私がこの書物を著すのに当たり、過去の学者で最も感謝したのは、王念孫、王引之、俞樾、孫詒讓の四人である。最近の人では章炳麟先生に最も感謝した。北京大学の同僚では、錢玄同、朱希祖の両先生からこの本を著すに当たって多大の援助を賜った。¹²

王父子が胡適を助けたのは主に校勘と訓詁である；それ以下の四人は全て章炳麟と密接な関係がある。彼の師匠でなければ、彼の学生である。錢、朱は諸子学を研究しなかった。俞、孫は諸子学によって知られているが、まだ校勘、訓詁を主としていた。胡適が、既に清代の学者は「多くの場合、通貫の努力をしようとはしなかったが」「章炳麟になってやっと、校勘、訓詁だけではない、筋道の通った、系統的な諸子学が別に出現した」¹³と認めた以上、『中国哲学史大綱』で中国人の著述を引用し、哲理に言及したのはわずかに章炳麟ただひとりだけであつたとしても無理からぬことである。

このような引用が大変少ないことは、胡適が当時、旧学の書物について広範囲に読書していないことを具体的に表し、また当時の諸子学研究の現状がどの程度のものかを大体において反映してもいる。

清末の諸子学興隆こそは中国學術史上の一大転機であり、この点については徐々に研究者に重視されてきた。¹⁴かつて、梁啓超は清代の学者が諸子学を研究した理由を次のように述べている。すなわち、最初は尚古の立場から、諸子を用いて經書を校勘しようとしたからであり、その後、「文学を校勘しようとするれば意味を必ず探求しなければならない。その意味を探求しようとするれば、新しい理解が生まれる」¹⁵と。この説はだいたい信頼できる。学者が主流のイデオロギーに挑戦しようとしたという立場から諸子を

研究対象に選んだということも排除できない。汪中こそはその一つの好例である。梁啓超は、墨学は既に二千年の間廃れたが、清代の中葉、考証学の登場とともに復興され、「汪中は最初にこの学を研究した」と言った；侯外廬は清代初頭の墨学は既に徐々に学者の注目を集め、「顧炎武、傅山はいずれも墨学を尊崇した嫌いがあるし、顔元は表面では六経を、実際には墨学を尊崇した」⁹⁰と述べた。両者（梁啓超、侯外廬）のうち、前者は学術の発展を描写し、後者は学術の伏流に着眼し、互いに補いあうことができる。少なくとも汪中からは、荀子、墨子を研究する目的が、ただ経書校勘のための補助的道具ではなくなったのである。彼の「荀卿子通論」と「墨子序」とは以上の理由からこそ梁啓超、侯外廬に二千年来の「思想の質的变化の枢機」と評価されたのではないか。つまり純粋な考証学の著作でも価値判断を含んでいるのである。俞樾が「経学研究の傍らに諸子研究をした」のは、もとより「前漢の経学者の諸論は貴重であるから、まして諸子はそれより古いものであるから貴重である」という発想に基づくためであり、同時に「周秦兩漢の諸子の書物もまたそれぞれ独自の価値がある」⁹¹と判断したからでもある。諸子の義理の上での価値に気づいたといっても、その価値を直ちに掘り起すことができることと同じではない。清代の学者は研究において普遍的に実証を重んじ、玄談（形而上的議論）を軽んじるから、経書と諸子を対等に見ると言っても、諸子を「専門の学」として研究したので、義理の上で奥深い道理を探り徹かにしか見えない優れたところを明らかにすることができたとは思えないのである。清代の学者が諸子を復興して、最も力を入れ最も成果を上げたものとしては荀子と墨子を挙げねばならない。⁹²老子、荘子については「学者の好むところではないために、優れた研究は出なかった」胡適と梁啓超は、ともに章炳麟の『齊物論釈』が奇想天外である理由を、章氏が仏教学と「純粹哲学」に精通したので思弁に優れていたことと関係があると強調している。⁹³

章炳麟の諸子研究で、最も世の人から称賛されたのは墨学と荘学（荘子の学）とすべきである。⁹⁴前者は梁啓超、胡適がどちらも賛嘆して止むこと

がなかったが、後者は梁氏が必ずしも『莊子』の本意に沿っていないと不満をもらし、胡適は初めこけおどしをして、その後は口を閉ざしてこれを二度と話題にすることをしなかった。⁹⁹『中国哲学史大綱』の中で莊子を論じた第九編が最も精彩を欠いている。これは胡適が受けた哲学の訓練がこのような「東洋の神秘主義」に対して無力であることと関係があるし、彼の過度に「明晰な理解」を追求した学術思考の指向性とも関係がある。この一章はあらかじめ「莊子哲学浅积」という題で『東方雑誌』に掲載され、その小序に、胡適が『莊子』の内容を少しも理解していないことが更に一層現れている：

先人はただ莊子の哲学を大変神秘玄妙なもののみ考えるものだから、莊子を理解できなかったのである。私の考えでは、莊子の学説はその実全くどのような神秘玄妙なところもない。だから、私の莊子を論じた文を「浅积」と呼ぶのは、ただ平易な言葉で莊子の哲学を論じようとするからだけでなく、人々に莊子の哲学が浅薄なありふれた道理であることを知らしめようとするためでもある。¹⁰⁰

このような調子で胡適が莊子を説くのに、章炳麟がかりそめにも同調できるはずがなかったのである。1908年、章炳麟は東京の民報社で許寿裳、朱希祖、錢玄同、周兄弟（魯迅と周作人）らのために講義をした。その際、『説分解字』、『爾雅』の他に『莊子』と『楚辞』も講義した。¹⁰¹莊子を講義したものは整理されて『莊子解詁』となり、次の年『国粹学报』に連載され、その巻頭の題記に：

かつて、かの諸子九流は大いに盛んで、各流派には哲人が現れたが、かの莊子に勝る者はない。「逍遙遊」篇は万物が各々あるべきところに赴くのに任すべきことを説き、「斉物論」篇は宇宙原理を余すところなく説いて、『莊子』の立場から見れば、かの孔子、墨子などもあたかも塵芥で

ある。また、まして陸象山や王陽明などの輩が理によって万物を主宰させたことなど、問題にもならないことは言うまでもない。⁸²

章氏は諸子百家の中でただ莊子だけを推賞したが、このような考え方は後に幾分修正された点もある。たとえば『蕪漢微言』で、「文王、孔子、老子、莊子」を「中国の四聖人」として、かつ「大乘菩薩」と同等に扱っている。しかし、また『蕪漢微言』で、仏教家は「出世間の法が多く、内典（仏典）に詳しく」孔子、老子は「世間の法が多く、外王の道（外に王者の明敏さを行う道）に詳しい」。両者を兼ねた者はただ莊子しかいないとも言っている。⁸³『斉物論』という「内外の至宝」を章炳麟は終生愛好し、それについて様々な研究を重ねた。その『斉物論釈』は「一字は千金に値し」「千六百年もの長き間、これに匹敵する物はない」⁸⁴と自画自賛した。胡適がとても敵うわけがないのである。だから章炳麟は返書して『中国哲学史大綱』を批判するのに、専ら莊子の不備を突いたのである。

三

学者は研究するに当たって、それぞれ方針がある。胡適は諸子の「名学（弁論学）の方法」を中心に論述を展開したため、色々切り捨てざるを得ない所があった。梁啓超は『中国哲学史大綱』を批評して、「知識論の方面は到るところ意表を突く卓論があるが；おしなべて宇宙観、人生観の方面は十中八九浅薄か誤りの論である」⁸⁵この批評は過酷すぎないであろう。残念なことに、胡適はこのことについて必要な自省が乏しく、過分に蔡元培が序文で称賛した「漢学の家法」に陶醉した。この後、人に学問研究を教える場合、「大胆に仮設する」から「注意深く証拠を求める」へ段々と変わっていった。⁸⁶章炳麟が胡適の經学の研究方法で諸子を研究することを批判したのは、「墨弁」の一字についての論争に限られず、胡適の研究思想の方向性に対する総括であった。胡適は王念孫、王引之父子や俞樾、孫詒讓が經

書と諸子を同じ方法で研究したことを例に挙げ自己弁護に努めたが、このことは正しく清代の学者の研究法の限界に対して彼が殆ど無知であることを証明した。胡適は初めに諸子学の清代における発展を論じ、主に、「付属の国々が盛んとなって大国になる」のと同じことだと言い、繼いで体例の「ばらばらでとりとめがなく、くどくどしい」から「あらゆる所から勘案し全体を理解する」へ変化したと説明してみせたが、清代の諸子学の内在的思想の方向性についてはほとんど言及することがなかった。やがて彼は清代の学者の研究の厳密さに敬服すると、至る所で錢大昕の古代音韻の研究や王念孫の虚字研究を吹聴して、益々清代學術の得失を細かく辨別する暇がないほどであった。

章炳麟は清代學術の殿將たる俞樾、孫詒讓の高弟であったからこそ、清代の学者の研究の得失を胡適が遠く及ばない程切実に体得していた。所謂「経師の六法」は学問の奥深い所に入った者でなければとても言えるものではないのである；

名実を細かく見極めるのがその一である。証拠を重んじるのがその二である。妄りにこじつけることを戒めるのがその三である。凡例を守るのがその四である。情感を断つことがその五である。派手で無意味な言葉を除くのがその六である。この六者が備わらないで、経学者になれた者は天下にはいない。⁸⁷⁾

それに続いて、章炳麟は当代の経学者を品評して、「訓詁に精通し筋道がたっており、事実を広く調べて乱れず、物事の文や筋道を詳密に洞察し、先人に未だ明らかにされていない所を明らかにし、意味を一つ定めると共に、泰山のように不動である」俞、孫二人の師を第一流とした。そこで、胡適は多分章氏のこのように尊崇していた俞樾、孫詒讓の兩人を例に挙げることで相手の反駁を封じようと思っていたのであろう。俞、孫さえも「やつと学問の初歩の段階にいただけである」と斥けられるとは、彼は思いもつ

かなかったのである。章氏のこの発言は決して論戦のために故意に「鬼面、人を驚かす」という類のものでは決してない。これは章炳麟の学術思想と彼の清代学術に対する全体的評価に係わっている。すなわち、章は兪、孫両経学者を評定するとともに、更に顔元、戴震らの大学者についても論文を著し紹介をした²⁸のである。章炳麟の心中では、兪、孫などの類の経学者でさえも学問の究極の境地に到達した者ではなかったのである。

九流の儒と経師の儒を区別すること²⁹こそが章氏が中国学術史を理解する特殊な視角であった。章炳麟が経師と儒者をそれぞれどのように毀誉褒貶したかは時勢に従ってかなり変化していった。ここではただ彼の清代学術及び戴震に対する評価を簡略に述べることができるだけである。と言うのは、この評価は胡適の学問と密接に関係があるからである。

章炳麟は彼の著作の中で、清代の学者に言及したものが甚だ多いが、その中には道徳的判断に基づき、彼が提唱した「民族の大義」に呼応し、毀誉褒貶が時に偏頗を免れなかったものも少なくない（たとえば、黄宗羲を始め尊び後に貶め、龔自珍、魏源を全面的に否定するなどがそれである）。³⁰しかし、章氏の全体の判断を見ると、彼の立場は大体終始一貫している。

最も章炳麟の清代学術に対する考え方を代表する著作には、前期に「清儒」、後期に「漢学論」がある。前者は今文経学を誹り、後者は疑古派史学を罵倒し、かなり事によせて自分の意見を述べる嫌いはあるが、しかしまたいずれも彼の学術的立場と通じており、基本的立論を損なうものではない。1904年に初見の『尙書』重版本に収録された「清儒」には、清代文化を総括した一段の結語があり、後世の少なからざる学者に引用されている。

清代には、理学の言論はその生命を終え余華もはやなくなった；忌むべきことが多く、ために詩歌、文史はがんじがらめに締めつけられ、愚民政策の故に経世先王の志は萎えた（この三者はいずれも人為的なものであるが、しかしそれは宋、明よりはるかに過酷である）もし家に知恵ある者がいれば大挙して経学へ向かい、それによって死の恐怖を和らげ

だが、その経術はただ巧みに近づいただけなのである。

清代の学者の学問を具体的に見ていくと、今文経学を除いて、大体の特徴は「経術によって興亡の歴史を明らかにしないので、議論には不向きであり；陰陽によって人事を断じないので、真理を探求するのに優れている」点にある。経学者の学問について言えば、清代の学者の成果は他に卓越し明らかであり、天空の太陽の如くである。亡くなる一年前に「漢学論」を発表したが、章氏はなおこの説を堅持していた。

清代、漢学を宗とする者は、訓詁を明らかにし、制度の優劣を見極め、三礼を秩序立てて、たくさんある経文は曲がりなりにも理解することができるようになった。その功績はもとより少なくなかったのである。

しかし、このような賛美の言葉はいずれも経世と言理への可能性を排除した後になって始めて述べられたものである。章氏は清代の読書人の境遇が困難であったことを理解していたので、魏源の戴震らに対する「漢学派と学問を争う」ための攻撃⁸⁹に決して同意しなかった。しかしこのことは章炳麟が清代の学者の学問の筋道や方法を全面的に認めることを意味しない。

東京で講義をした時、章炳麟はかつて「清儒」の中では、はっきりとは表せなかった潜台詞（劇でせりふに潜んでいる言外の意味）を、きっぱりと披瀝した：「結局、清代の学説は充分に発達したのであろうが、ただ哲理を重視しなかったために一方に偏ったのであろう」⁹⁰魏晋の玄学を日に日に深く悟るに従って、章氏は晋代の学者の経学は「附会空疎」であるという旧説⁹¹をさっと改め、「漢学論」で次のように強調した：

経文には古文今文の違いがあるが、経学には漢、晋の違いなどない。清代の経学研究が大成しなかったのは、その信奉していた漢学という名に引きずられて、魏晋の学問を蔑視し、同列に扱わなかったからである。⁹²

章氏は魏晋の經学を尊重したが、その中には党派意識が潜んでいた。たとえば、彼が今文經学の牽強附会を捨ててから「引きずられるものはなくなり」；「段々と古文經学を尊重し信じるに足るものであることがわかった」故に精密さでは漢代の学者に及ばないけれど、その根幹を論ずる点では漢学よりも優れているのである⁹³と云っている。しかし、重要な点は、章炳麟が、魏晋の学者が儒術だけを尊ぶ態度を改め、広く様々な学説を採用し、主体的に新しい解釈を打ち立て、諸子をも研究し、仏典をも研究し、「深思自得」したことに注目したことである。その結果、「真に哲学によってその名を轟かせたのは、魏より始まったのである」⁹⁴これらの、老莊を好み、清談を得意とし、「往々に仏典に強い影響を受けた」玄言の士は經学には向かないが、諸子学には向いており、たとえば、郭象の『莊子注』、張湛の『列子注』などは、いずれも哲理を明らかにできたのである。

清代の学者は、魏晋の玄言の価値が分からず、ひたすら賈逵、馬融に追隨して、賈、馬が經学には向くが、「諸子学には向かず」更に「玄理」を研究するには向かないということが全く分かっていないのである。清代の学者にも仏典を読み諸子を研究する者はいるが、しかし玄理に到達することができず、遂に大成することが困難であったのである。章炳麟は自ら言うがごとく、中年以降仏教の法相宗に親しみ、兼ねて魏晋の玄理を述べた文献を学んで、やっと清代の學術のこのような致命的弱点が分かったのである。

私は思うのだが、この百年来、学者諸公は經学、史学以外は学問ではないと考え、彼らは諸子、仏典はただ雅馴なるものだけを採り、その逸事を拾い上げ、名理は深く忌み嫌った。普段は広範に書物を読み、些細な本の雑駁な出来事には興味を示して読むが、魏晋の玄言は読もうとしない。その文がこの程度なのだから、その學術もしいたものである。⁹⁵

經学者が学問をする場合は、ただ音韻、訓詁、名物、制度だけを研究す

るだけであるから、その類の研究をしてさえいればさしたる障害は起こらないのであるが、しかし一旦「多くは事実を述べる」「経」から「多くは義理を明らかにする」諸子に研究対象を転ずると、清代の学者の「空談（抽象的な議論）を尊ばない」という傾向は、明らかな欠陥となってしまうのである。1909年、章炳麟は『国粹学報』に書簡を送り、彼がなぜ東京での講義で音韻と諸子を選んだかを説明した。

思うに、学問は言語をその本質としており、だから音韻、訓詁はそれを明らかにするための鍵である；真理を到達点とするので、周秦の諸子こそは学問の深淵なのである。⁶⁶

章炳麟は諸子を研究するにあたり、「真理を探求する」態度で行い、「名物を解釈する」態度では行わず、そのようなやり方は「漢学専門の業」ではないということになり、当時の学者と大いに異なることになった。そのために自分を理解する者に出会うのが難しいと嘆くほかなかったのである：「もし魏晋の賢人たちが今いたとしたら、彼らと共に語るができるのだが」

胡適は実は章炳麟の諸子研究の革命的意義にも注目してはいたのだが、しかし彼の学術的興味は多くの場合「首尾一貫させること」と「系統的に捉える」ことから考えることにあったので、章氏が最も会得していた「玄言」と「哲理」にはあまり関心を持たなかった。章炳麟の清代の学者の旧套を超越し、二度と「経学研究の方法で諸子を研究しない」という学術思考の方向性については、胡適はあまりはっきり理解していなかったのである；しかしこのことに係って章氏が戴震を顕彰したことには、胡適は心から承服し、「蕭何の規則、制度を曹参がそのまま継承したように」、踏襲したのである。

〔原注〕

- (1) 胡適の「研究国故的方法」(『東方雑誌』18巻16期、1921年8月)と、顧頡剛の『古史辨』第一冊「自序」を参照。
- (2) 『華国月刊』1巻4期(1923年12月)に所載の「与章行箴論墨学第二書」は遺漏があるようなので、ここでは『胡適文存二集』に収められた「太炎先生的第二書」を底本とする。
- (3) 『胡適文存二集』巻1第222頁(上海:亜東図書館、1924)。
- (4) 『章氏叢書』本『蕪漢微言』第74頁(浙江図書館校刊、1919)。
- (5) 章太炎:『蕪漢閑話』、『制言』13期、1936年3月。
- (6) 『章太炎政論選集』(北京:中華書局、1977)所収の「諸子学略論」と、『国学概論』(香港:学林書店、1971)の「国学之進歩」の章を参照。
- (7) 張冥飛筆述『章太炎国学講演集』第171頁(上海:新文化社、1935年四版)
- (8) 『胡適的自伝』第6章「青年期逐漸領悟的治学方法」を参照。
- (9) 胡適の晩年の回想に拠れば、蔡元培が彼を北京大学の教員に招聘したのは、彼の「詩三百編言字解」を読んだからだという。(『胡適之先生年譜長編初稿』第294頁)。「西洋の学問とともに、漢学をも理解できる」という言葉は、蔡元培の『中国哲学史大綱』の為に書いた序に見える。
- (10) 梁啓超:『清代學術概論』[『梁啓超論清学史二種』第77頁(上海:復旦大学出版社、1985)]。
- (11) 白吉庵『胡適伝』(北京:人民出版社、1993)第119頁所録の「胡適存件574号」及び胡適『『中国古代哲学史』台北版自記』(『胡適學術文集・中国哲学史』第4~5頁、北京:中華書局、1991)を参照。
- (12) 『中国哲学史大綱』再版自序、(『胡適學術文集・中国哲学史』第3頁)。
- (13) 『胡適學術文集・中国哲学史』第27頁。
- (14) 張灝『危機中の中国知識分子』第1章(中国語訳本は1988年山西人民出版社から刊行された)で、諸子学の興隆を清末思想潮流に影響を及ぼした中国三大資源の一つとしている。:また、王泛森の『章太炎的思想』(台北:時報文化出版公司、1985)第2章第2節で、清末諸学者の諸子学への見方を簡潔に述べているが、いずれも参照に値する。

- (15) 『清代學術概論』(『梁啓超論清学史二種』第49～50頁)
- (16) 梁啓超『中国近三百年學術史』(『梁啓超論清学史二種』第359頁)と侯外廬『近代中国思想学説史』第481頁(上海:生活書店、1947)を参照。
- (17) 俞樾『諸子平議』序目、[『国学基本叢書』本『諸子平議』(上海:商務印書館)]。
- (18) 『胡適學術文集・中国哲学史』第27頁と『梁啓超論清学史二種』第363頁を参照。
- (19) 同上。他に、胡適は『中国哲学史大綱』の「導言」の中で、章太炎の「原名」、「明見」、「齊物論釈」の三編を更に空前絶後の著作」と称賛している。前二編は本文中に度々引用されているが、『齊物論釈』は二度と現れない。多分その大名に恐れをなし、取り上げざるを得なかったのだろう。
- (20) 胡適:『莊子哲学浅釈』(『東方雜誌』15卷11、12期、1918年11、12月。)
- (21) 魯迅の「關於太炎先生二三事」と許寿裳の『章炳麟』にはともに『説文』と『爾雅』が言及されているだけである。;北京図書館に現存する『朱希祖日記』には『莊子』と『楚辞』を聴講したという記載がある。時を同じくして講義を聴いた汪東は更に章氏が仏教で莊子を解釈したという特色にも言及している。:「講義は『説文』と『莊子』を主とし、彼が『莊子』を解釈するのに、訓詁を明らかにする外、玄言をも解き明かし、その場合、多くは仏教と符合していた。後にその趣旨を簡潔に纏めて『莊子解詁』を著した。」
- (22) 『章氏叢書』本『莊子解詁』第1頁(浙江図書館校刊、1919)。
- (23) 『章氏叢書』本『蕪漢微言』第38頁、26頁。
- (24) 章太炎「自述學術次第」、[『太炎先生自定年譜』第53頁(香港:竜門書店、1965)]と「与龔未生書」(『章太炎政論選集』第702頁)を参照。
- (25) 梁啓超:「評胡適之『中国哲学史大綱』」(『時事新報・学灯』1922年3月13～14日)。
- (26) 陳平原「“仮説”与“証明”—胡適の文学史研究」(『学人』第五輯)を参照。

- (27) 「定経師」(『民報』第10号、1906年12月)
- (28) 「悲先戴」(『民報』第9号、1906年11月)
- (29) 「学隠」(『章太炎全集』第3卷161頁(上海人民出版社、1984))。
- (30) 「教育的根本要從自国自心発出来」(『章太炎の白話文』第56頁(台北：芸文印書館、1972))。
- (31) 戴震の「与某書」は、世の人が「己の狭い見解を無理やりに古聖賢の立言の趣旨だとする」ことを批判し、この源を「晋代の人が付会し空疎なことを穿鑿することが益々多い」という過ちまで逆上った；章炳麟は『尙書・清学』の中で、その説を受け、経学は魏晋に乱れ、宋明に至って益々でたらめになった」と言っている(『章太炎全集』第2卷155頁)
- (32) 「清儒」は『章太炎全集』第3巻に見え、「漢学論」は『章太炎全集』第5巻に見える。
- (33) 「漢学論」と「経学略論」(『章氏国学講習会講演記録』3、4期、1935年11月)を参照。
- (34) 「案唐」(『章太炎全集』第3巻451頁；章太炎：「論中古哲学」(『制言』第30期))。
- (35) 章太炎：「自述学术次第」、(『太炎先生自定年譜』59頁。)
- (36) 章太炎：「致国粹学報社書」(『国粹学報』己酉年第10号、1909年)

訳 注

①国学とは一般に西学(西洋の学問)に対する中国の伝統学問のことである。章炳麟にとっての国学とは、そのような単なる中国の伝統学問を意味せず、欧米に対抗しうるように、伝統学問を自らの手で再編したものであった。彼の「国学」形成の過程を示すものが、『尙書』(原刊本)、『尙書』(重訂本)、『検論』であり、彼が辛亥革命前夜の革命勢力退潮期に、日本で仏教や荘子哲学を深く学び、その精華をまとめた『斉物論釈』は彼の国学の到達点を示すものである。なお、彼の国学提唱は『国粹学報』発刊(1905年)より始まる。

②国故整理とは、国故学即ち国学（中国の伝統學術文化）を整理再検討して、その価値体系を再編成しようとする學術運動である。

胡適は国故整理について、既に「論国故学—答毛子水」（『胡適文存』第一集卷一所収、1919年8月）でその必要性を述べ、更に「新思潮的意義」（『胡適文存』第一集卷四所収、1919年11月）では国故整理を「問題を研究し」「学理を輸入し」「文明を再生する」ことともに彼の思想啓蒙策の一環として位置づけ、その原則として、「批判的姿勢」「科学的方法」を旨とし、具体的には、系統的に整理し、それぞれの學術の淵源を追求し、科学的方法で精確な考証を行い、古人の本当の意義をはっきりさせ、それらを総合して研究して、「その本来の姿に戻す」と述べている。更に、『『国学季刊』発刊宣言』（『胡適文存』第二集卷一、1923年1月）では、国学研究において、次の三方面、（一）歴史的着眼から国故研究の範囲を拡大する、（二）系統的な整理によって国学研究の資料を分類する、（三）比較研究によって国学の資料の整理と解釈を助ける、に意を注ぐよう主張した。

胡適のこのような国故整理の主張は、青年研究者、特に彼の勤務していた北京大学を中心にして、大きな影響を与え、その後、彼らは中国學術界で一大勢力を占めた。例えば、中国古代史を見直し、数多くの業績を残した、古史弁学派（疑古学派）は顧頡剛を始め胡適の影響下にあった。

また、胡適自身が残した国故整理の成果は、これまで知識人には一顧だにされなかった『紅樓夢』をはじめとする近世白話小説の校訂、『紅樓夢考証』などのその研究と、禅宗史研究である。

③兩人の学問訓練は、大いに違いがあるが、特に旧学（中国伝統学問）に対する差は歴然としている。章炳麟は12歳でまず外祖父の朱有度から經学の手ほどきを受け、それ以後杭州の訥經精舎に入るまでに、周、秦、漢の書物、例えば四書五經などの經書、史記、漢書などの史書、老莊などの諸子の書物を広く読み、更に唐の『九經義疏』などの注疏

の類、顧炎武の『音学五書』、王引之の『経義述聞』などの訓詁の研究書を読み、更に清代学術の集大成である阮元編の『皇清経解』をも読破している。詒経精舎に入学時には、既に経学の基礎が出来ていた。その後、章は兪樾、譚献などの碩学に師事し、益々経学をはじめとする旧学を深めたのである。（『章太炎年譜長編』、1977年、中華書局、湯志鈞）

それに対して、胡適は4歳から13歳まで近所の塾に通い、そこで蒙学の書と、四書及び五経の一部を学んだ。13歳で上海の梅溪学堂（新式学校）に入学した後は特に旧学を学んだとは考えにくい。（『胡適研究叢稿』、1983年、四川人民出版社、耿志雲）

④この講演は、「国学の衰微を深く憂慮し」た江蘇省教育会が、当代の大儒章炳麟に依頼したもので、1922年4月1日から6月17日にかけて、計10回にわたって行われた。その題目は、第一回「国学大概」、第二回「続国学大概」、第三回「続国学大概」、第四回「国学之派別」、第五回「経学之派別」、第六回「哲学之派別」、第七回「続哲学之派別」、第八回「文学之派別」、第九回「続文学之派別」、第十回「国学之進歩」である。

第一回には聴衆が三、四百名にも上り当初用意した会場（省教育会大会堂）では手狭になり、以後会場を、千名以上収納可能な、中華職業学校の職工教育館に移したが、第九回には聴衆が僅か七、八十となり、会場を元に戻すにいたった。

この講演は、『申報』に随時その筆記が掲載されたが、同年、曹聚仁がその筆記を整理し、上海泰東図書局から『国学概論』という題名で出版した。『国学概論』は『申報』に掲載されたものより大体詳しいが、一部削除されたところもある。他に、この講演を張冥飛が筆記した『章太炎先生国学講演集』（1924、平民書局）もある。（『章太炎年譜長編』、1977年、中華書局、湯志鈞）

⑤『国学季刊』は北京大学から1923年1月に創刊され、1937年6月に

第六巻二号で停刊、1950年7月に復刊され、1951年7月に第七巻二号で廃刊された。この雑誌は、胡適が始め編集責任者となり、国故整理運動の中心的雑誌の役割を果たした。

⑥章炳麟は当時、1920年以来、深く係わった連省自治（南方の各省が自治をおこない、その後各省が連合して連邦国家を創るという、中国統一運動）に関連して、その政見を電報で盛んに関係方面に打ち、それを公表した。

⑦『墨子』「経上篇」では「辯争彼也」となっており、胡適は「彼」を「佻」の誤りであるとした。

⑧孫詒讓は、章炳麟の師ではなく、学問上影響を受けた先輩である。章が著した兪樾の伝は「兪先生伝」であるのに対して、孫詒讓の伝は「孫詒讓伝」であることから見ても明らかである。

⑨胡適は、国費留学生として1910年9月渡来し、まず実学救国を目指してコーネル大学農学部に入學したが、農学に興味が持てず、1912年同大学文学部に転部し1914年卒業し、1915年コロンビア大学大学院に入學し、プラクマティズムの大家デューイに師事して哲学を研究した。（『胡適研究叢稿、1983年、四川人民出版社、耿志雲』）

⑩詒經精舍は、阮元により創設された書院で、乾嘉の学のいわば大本營であり、章が入學当時は兪樾がここの長を務め、今文古文の兼学、経と諸子の兼学の傾向があった。

⑪この「胡適文書(胡適存件)」とは、胡適が1948年12月北京を脱出した時に、自宅に大量に残した原稿、書簡、日記、書類のことで、後に中国社会科学院近代史研究所の所蔵となり、胡適研究の専門家耿雲志教授の下、最近整理され、近々影印出版されるという。（『東方速報』1993年55号）

⑫清代における『荀子』『墨子』の本格的な研究は、汪中から始まるが、清代の『荀子』研究の主な著述には、王念孫「荀子雑誌」（『讀書雜誌』）、兪樾「荀子平議」（『諸子平議』）、王先謙の『荀子集解』などがある。

また、『墨子』研究の主な著述には、廬文弼、翁方綱、孫星衍らの本

文校訂の業績を踏まえ、畢沅が『墨子』の全体に校訂を行い、注釈を付けた校訓本『墨子』、王念孫の「墨子雜誌」（『読書雜誌』）、俞樾の「墨子平議」（『諸子平議』）、諸家の校訂を広く参照しながら、畢沅の不備を補い、さらに孫詒讓の新たな見解を付け加えた詳細な校訂本『墨子間詁』などがある。

⑬章炳麟は墨学については、その力学、光学や名学（論理学）に、西洋の学問に対抗しうるものとして強く興味を持ったが、墨学に関する論考は管見の限りでは、「諸子学略説」（1906年）、『尙書』（原刊本、重訂本）、『検論』、「国故論衡」（1910年）、「諸子略説」（1935年）などに散見するだけで、まとまったものはない。それに対して、荘子については、「諸子学略説」（1906年）、『尙書』（原刊本、重訂本）、『検論』、『諸子略説』（1935年）などに散見するだけでなく、『荘子解故』（1909年）、『齊物論釈』（1911年）などの畢生の著作もある。

⑭儒家を九流の儒と経師の儒とに区別する見方は、「諸子学略説」（1906年、9、10月、『国粹学報』丙午第八、第九号）に見える。章炳麟は、そこで孔子を「実証を旨とする歴史家」即ち「経師」と「政治と実利を旨とする教育家」即ち「儒生」との二面から捉え、前者のみを評価し、後者は富貴利禄を求めるものとして斥けている。そして、孔子以後の儒家も「経師」と「儒生」とに分化したとする。

この「諸子学略説」以降、管見の限りでは、章炳麟は儒家をこのような経師と儒生という枠組みでは捉えてはいない。

⑮章炳麟は黄宗羲について、初めは「興浙会序」（1897年）では、「聖智摹慮が黄宗羲の様な者を見たことがない」と尊崇し、また「書「原君」篇後」（1898年）では、その主著『明夷待訪録』を高く評価したが、民族主義（排満主義）提唱後は、「衡三老」（1906年）では、『明夷待訪録』で高邁な主張をしているにもかかわらず、息子を自分の身代わりに清朝に出仕させた食わせ者と斥け、明末清初の三老（顧炎武、王船山、黄宗羲）中で最下位に置き、また「非黄」では、学術思慮の点で

は顧炎武より遙に落ち、また、守節の点では王船山に遙に及ばない黄が、名声ではこの兩人と肩を並べているのは彼の詐術のためだと、口を極めて罵倒した。

魏源については、「清儒」(『尙書』重訂本、『検論』)で、「大袈裟な出鱈目で好んで経を説き、貴人を悪賢く説得した」と口を極めて罵り、龔自珍についても、「清儒」(『尙書』重訂本、『検論』)で、魏源、邵懿辰と十把一絡げに、学問の基礎がなく、所論は支離滅裂と酷評した。

解 題

本稿は、陳平原氏の「章太炎与胡適之于经学、子学方法之争」の日本語訳である。この論文は、本年(1994年)日本で行われた講演原稿である。この講演は、まず本年3月12日、中国社会文化学会の3月例会で行われ、継いで本年4月23日、大塚漢文学会の月例会でも行われた。この二回の講演原稿の間には、内容に基本的な相違点はないが、後者は前者に比べ少し短い。それは後者が注を一切削り、引用文を一部削ったためである。但し、後者は前者の単なる簡約版というわけではなく、筆者によって語句が加えられ分かりやすくなったところもある。そこで、本論文を翻訳するに当たっては、前者すなわち中国文化社会学会での原稿に基づくこととし、後者すなわち大塚漢文学会での原稿を参考とした。

次に、訳文の成り立ちは、以下のごとくである。大塚漢文学会での講演に先立ち、本学の宮内教授、白井助教授、二松学舎大学の佐藤一樹氏(中途参加)と阿川は、本論文を四回にわたって輪読した。その際、宮内教授が第四章までの試訳稿を作成された。輪読終了後、阿川は、本論文は、近現代中国学術研究の方向性に問題を提起したものであり、かつ難解であることに鑑み、日本語に翻訳すれば、幾らかでも斯界に裨益するところがあるのではないかと思い、翻訳することにしたのである。阿川はまず本文、注を翻訳し、それを宮内教授の訳稿と対照しつつ、訳文を検討し、訳文を完

成させ、更に、それに訳注を加えた。以上のように、本訳稿は言わば輪読会の産物であり、宮内教授、白井助教授、佐藤一樹氏との共訳とも言うべきものである。しかし、もちろん訳文を最終的に完成させたのはあくまで阿川であり、もし誤訳や生硬な表現があれば、それはあくまで阿川の責任である。

本論文の内容については、冒頭の「内容提要」をご覧頂ければよいので、贅言は避けたいが、その要旨は、近代以降の中国における学術研究がその研究方法として、胡適の「実証主義」のみを受け継ぎ、章炳麟の哲理を求めるといった問題意識を一顧だにしなかったため、今日、その欠陥が露呈することとなったという、近現代中国学術研究の方向性を批判することにある。実に示唆に富む論文である。

著者、陳平原氏は1954年に広東生まれ、中国近現代文学研究の泰斗、故王瑤北京大学教授の晩年の高弟で、文学博士、現在北京大学中文系教授を務める。著書には、『在東西方文化碰撞中』、『中国小説叙事模式的転変』、『二十世紀中国小説史』第一巻、『書裏書外』など多数あり、中国近現代文化研究に斬新な切り口で様々な問題を提起をしている、新進気鋭の研究者である。

なお、今回はこの論文の前半である第三章までの翻訳である。後半は今後公刊予定である。